

NEW

『ひめゆり平和祈念資料館 ガイドブック 展示と証言』刊行



表紙

2023年3月30日、『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック 展示と証言』を刊行しました。ガイドブックを一新するのは19年ぶりです。

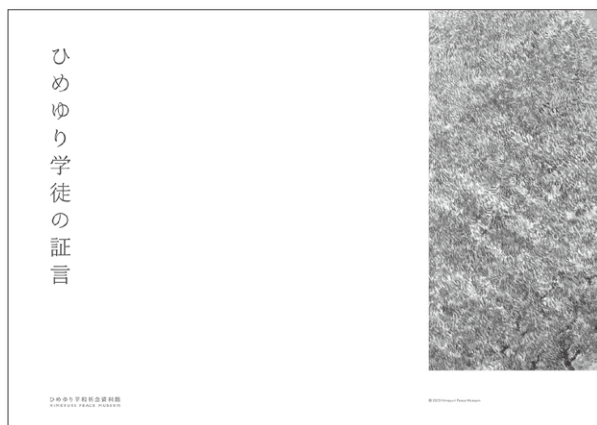
2021年にリニューアルした常設展示の内容をほぼすべて掲載しています。第4展示室のひめゆり学徒の証言（大型証言本）は後半に章として独立させました。

写真やイラストをふんだんに用い、ひめゆりの沖縄戦をわかりやすく伝える1冊となっています。修学旅行や平和学習の事前学習資料としてもご利用ください。

A4横 177ページ ¥2,500(税込)
2023年3月30日発行

ひめゆり平和祈念資料館で購入できます。
郵送の場合は、別途送料・振込手数料がかかります。

ご注文お問い合わせ：TEL098-997-2100



裏表紙

CONTENTS 目次

- ◆ 新ガイドブック刊行 01
- ◆ コラム相思樹 05
- ◆ 本村つる前理事長が逝去しました 02
- ◆ 仲宗根政善日記抄(66) 06
- ◆ トピックス 04
- ◆ 本棚(仲程昌徳) 07
- ◆ 2023年度の主な事業・イベント 05
- ◆ 統計に見る2022年度 08

ご来館のみなさまへ

新型コロナウイルス感染症対策のため、団体見学は予約制となっております。必ず事前にご予約ください。

本村つる前理事長が逝去しました



2023年4月7日、当財団前理事長の本村つるが逝去しました。1945年、ひめゆり学徒隊の最上級生として、19歳で沖縄戦を体験。戦後は教職につき、退職後、ひめゆり資料館の設立に尽力しました。7代目財団理事長、5代目資料館館長を務め、沖縄戦の継承や次世代の後継者育成など館の活動を牽引してきました。証言員(元ひめゆり学徒)や資料館職員から信頼され、精神的な支えとも言える存在でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。

長年一緒に活動してきた 証言員の追悼の言葉

●前館長 島袋淑子

本村さんに聞けばなんでもわかるというぐらい、みんなが信頼していた。私が館長になったときも、本村さんがいるから安心してた。ほんとに大事な人を失って。とても心細くて悲しくて。

●証言員 仲里正子

先輩だけど私たち下級生にも同僚として接してくれて、何でも言い合えた。感謝の気持ちでいっぱい。資料館づくりの一番中心になってくれて、私たちの心の支えだった。

本村先生のご逝去を悼む

ひめゆり平和祈念資料館 館長 普天間朝佳

学級委員長のような存在

本村先生を写した1枚の写真がある。本村先生たち元ひめゆり学徒のみなさんが資料館建設に取り組んでいた1986年ごろ、ひめゆり同窓会館で話し合いをしている様子を写した写真である。

本村先生は黒縁のめがねをかけ、ペンを持ち、真剣なまなざしをしている。この写真を見て、誰かが「学級委員長みたい」と言っていた。私もそう思った。優秀で、責任感が強く、常にみんなを引っ張っていく…私にとって、本村先生はまさに学級委員長のような存在だった。



平良孝七撮影
(名護博物館所蔵)

本村先生のこのリーダー的な性格は、11人きょうだいの長女という生い立ちから来ていると、私は思う。本村先生は

長女として、小さいころから両親を助け、家事、育児、家業(那覇市泊で銭湯を営んでいた)に勤しんだ。

小学校2年生の時に学校での遊びに夢中になり、帰りが遅くなる日が続き、そのために家の手伝いもおろそかになり、とうとう父親から「君は学校に行かなくていい。ここに座っておけ」と大目玉をくらったことがあったという。このエピソードからも、本村先生が長女としていかに家の手伝いを担っていたかが伝わってくる。

何かの時にはまず本村先生に相談した

資料館建設の時、本村先生は展示づくりを担う資料委員会の委員長として、生存者仲間とともに展示の中身づくりに取り組んだ。ひめゆり同窓会は一丸となって資料館の建設に取り組んだが、県から「ひめゆりの塔は霊域だから建設予定地には許可できない」とか「ひめゆりの塔のガマ(洞窟)の展示は認めない」など、なかなか建設の許可が下りず、建設は難航した。

その間、本村先生は同窓会役員や資料館建設の総合プロデューサー、資料委員会の間に立つことになって苦労されたと聞いている。先輩たちからはかわいがられ、後輩たちからは慕われる本村先生だからこそ、その役目を担うことができたのではないかなと思う。

資料館開館後、本村先生は事務局長、館長、理事長などの要職を担い、生存者の仲間たちとともに、資料館の運営を担ってきた。

企画展やイベント、本の出版など、何かやろうと思った時、私はまず本村先生に相談した。開館10周年で「沖縄戦の全学徒たち」の特別展を提案した時には、「全部の学徒を取り上げるのは難しいのではないか」という声が上がった。しかし、本村先生や安谷屋良子先生(第6代理事長)が「とても意義のある企画なので、やるべきだと思います」と後押ししてくれて、実現することができた。

2003年の「ひめゆり学徒の戦後」展の時も、「生き残った私たちをテーマにした展示会をご遺族はどう思うだろうか」と躊躇する声が上がった。私が、戦争体験のない自分たちにとっては戦後のひめゆりの体験を知らせることもとても意義があると思うと話すと、本村先生は「普天間さんたちが大事なテーマだと思っているということなので、やりましょよ。ご遺族もきっと理解してくださると思います」と言ってくれて、開催することができた。

本村先生はリーダー気質だったし、強く毅然としたところがあったが、強圧的ではなく、とてもユーモアがあった。冗談を言ってみんなをよく笑わせていた。まじめな話をするときには真剣に、楽しむときには目一杯楽しむ、とても人間的な魅力に富んでいて、また器の大きな方だった。

本村先生から自慢話を聞いたことは一度もなかった。自分から前になくても、自然と周りから上に推される方だった。たいへんな思いをしている時もたいへんだと愚痴をもらっているのを聞いたことがなかった。たいへんなことを黙々とやり遂げる人だった。

心の奥の思い

沖縄戦中は学徒隊本部勤務で、砲爆撃の中、引率の先生とともに各壕へ本部からの連絡を伝えたり、学友たちの状況を確認したり、学友が亡くなると看取ったりすることが役目だった。南部撤退の時は、負傷して歩けなくなった学友を担架に乗せ、砲撃の中、南部まで運んだ。南部撤退後、重傷を負い苦しみながら亡くなった学友の最後を看取った。

解散命令後、重傷を負った後輩を戦場に置いてきてしまったことを終生悔いていた。後で迎えに来るからと伝えたのに、とても迎えに行ける状況ではなかった。あの後、砲爆撃が落ちる中、どのような思いでいたのだろうか。迎えに来ると言っていたのにどうして来ないのかと思っていたのではないかと。当時のことを思うと胸が苦しくなる。あの時のことをどんなふうにも言っても言い訳になってしまうので、戦争体験は話したくないと言っていた。

本村先生は戦争体験の講話活動をほとんどしなかった。館長や理事長などの要職に就いていたということもあったが、心の奥には、そういう思いがあったのではないかと。

叱られた経験が今の私のベースに

私は職員の中では一番本村先生に叱られたほうだと思う。長女でしっかり者の本村先生からみたら、7人きょうだいの末っ子の私は甘やかされて育ったように見えたかもしれない。今から思うと、頼りない私を少しでもしっかりさせようと

いう親ごころ? だったのだろう。資料館を運営しているといろいろな難題にぶつかる。職員の中でも一番古株の私にはもっとしっかりしてほしいと思っていたのだと思う。ほかの職員には優しいのにとひがむこともあった。でも、時々叱られたことが、今の私のベースの一つになっているのは間違いない。

本村先生と家が近かったので、時々家までお送りする機会があった。車の中で、戦争体験だけでなくプライベートなことなど、いろいろな話を聞かせていただいた。終戦直後のご主人とのなれ初め、河原でのデート、ご主人のお酒の力を借りての結婚の申し込み…ふだんには見られない“乙女の”本村先生がそこにはいた。2016年に出版された本村先生の自伝『ひめゆりにささえられて』の巻末にもそのことを感じさせる詩集が掲載されている。

本村先生に教えていただいたことを

一つ一つ思いおこしながら

本村先生は最後まで、ご自宅で過ごされた。看護するご家族には相当な苦勞があったと思うが、それでも自宅療養を選んだのは、本村先生のことをご家族がほんとうに大切に思っていたからだと思う。本村先生が会いたいという人たちにも連絡をとり、最後に会う時間をつくってくださった。

私も亡くなる1週間前にお見舞いに行った。ひと月前までは座って話されていたのに、もう起き上がることはなく目も少ししか開かず、それでもか細い声で受け答えしてくれた。資料館のリニューアルはとても好評ですよと伝えると、「ありがとうね。職員のみなさんのおかげよ。これからもみんなで力を合わせて、周りの人たちにも支えていただきながら、資料館をよろしくね」とおっしゃっていた。

本村先生、これまで教えていただいたことを一つ一つ思いおこしながら、これからしっかり資料館の仕事をしていきます。そして、本村先生たちから受け取ったものを次の世代にしっかり引き継いでいきます。

どうぞ、やすらかにやすみください。ほんとうに、ありがとうございました。



証言員、職員と。前列中央が本村(2018年)

■ “ひめゆり”を伝えるワークショップ開発・実践プロジェクト

ひめゆり平和研究所の2022年度事業として「“ひめゆり”を伝えるワークショップ開発・実践プロジェクト」を実施しました。若い世代が主体的・能動的に戦争や平和について学び、考えるための手法の開発を目的として立ち上げたプロジェクトです。本プロジェクトでは、ふたつのワークショップの開発を試みました。

移動展でのワークショップ

今帰仁村では開発教育の専門家である玉城直美さんが、読谷村では当館学芸課長の古賀徳子がファシリテーターを務めました。イラストや写真を用いた自己紹介、ひめゆり入門 Q&A、フォトランゲージなどのアクティビティのあと、展示見学や感想交流を行いました。ワークショップの経験は、より関心を持って展示を見たり、違う視点や考え方を知ることにつながったようです。参加者からは「受け身ではない学びとなった」「発表し合うことが理解を深める」などの感想が寄せられました。



今帰仁村でのワークショップの様子

映像制作ワークショップ

ひめゆりや沖縄戦がテーマの映像作品を制作するワークショップです。映像プロデューサー山城竹識さんが講師を務め、2チームが約2か月間制作に取り組み作品を完成させました。映像を制作する過程での議論や、伝える映像にするために工夫を重ねたことは、参加者にとって、戦争や平和について改めて考え、映像を通して発信することの大切さに気づく機会になりました。12月には関連イベントとして、作品上映会と講師の山城さん、映画監督宮平貴子さんをゲストに「映像で伝える“平和”」をテーマにしたトークイベントを開催しました。



ワークショップ参加者の映像撮影風景



映像上映会でのトークイベント

■ 沖縄県主催平和啓発シンポジウムに館長登壇

2023年1月11日、東京都渋谷区の伝承ホールにて、平和について考えるシンポジウム「本土復帰50年に立つ沖縄、沖縄からの平和発信とは」(沖縄県主催)が開催されました。演出家の宮本亞門氏の基調講演とパネルディスカッションの2部構成で、パネリストとして沖縄県知事玉城デニー氏、平和教育ファシリテーター狩俣日姫氏、当館館長普天間朝佳が登壇しました。宮本氏は、基調講演で、戦争は天災ではなく人災であり止めることができると訴えました。シンポジウムではそれぞれの立場や経験を通して、平和を求める心を発信することの重要性、沖縄の過剰な基地負担の現状や、沖縄戦を伝えるための工夫や取り組みなどが話されました。

❖ 「第5回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」選考結果のお知らせ

2023年2月28日、「第5回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」選考委員会を開催しました。選考の結果、「ひめゆり平和賞」「特別賞」ともに「該当なし」となりました。

コンテスト事務局の推薦作を「ナイスチャレンジ!作品」として、当館 YouTube で公開しています。県内中学校の応募作品です。ぜひご覧ください。

公式 YouTube はこちら



第6回は2023年夏頃募集開始予定です。
ご応募お待ちしております。

❖ 2023年度の主な事業・イベント

当財団は、2023年度に以下の事業およびイベントを行います。

- ▶ ひめゆり平和研究所
 - ・特別展「ひめゆりとハワイ」（於：ハワイ。9月頃開催予定）
 - ・「第6回“ひめゆり”を伝える映像コンテスト」（夏頃開催予定）
- ▶ ホームページリニューアル（6月公開予定）
- ▶ 高校生が同世代に伝えるためのワークショップ
- ▶ 教員向けオンライン講習会、ガイド向け講習会
- ▶ 編集・発行
『感想文集ひめゆり 第34号』、『年報 第34号』、『資料館だより』第71号・第72号

❖ 資料館の動き（2022年12月～2023年4月）

2022年

11月26日 移動展「ひめゆりとハワイin読谷」（ユンタンザミュージアム）開催。2023年1月9日まで

2023年

- 1月7日 移動展「ひめゆりとハワイin読谷」でのワークショップ実践
- 1月10日 名桜大学学長講義「大学と人生」に学芸課長の古賀徳子が登壇
- 1月11日 沖縄県主催平和啓発シンポジウムに館長の普天間朝佳が登壇
- 1月13日 全国のハンセン病療養所内博物館学芸員による視察・質疑応答に説明員の尾鍋拓美対応
- 1月24日 JICA国別研修「コロンビア国の平和教育における現職教育研修制度強化」に学芸課長の古賀徳子が対応
- 3月26日 沖縄県文化振興会「令和4年度沖縄文化芸術の創造発信プロジェクト事業報告会」にて研究所所員の狩俣英美が報告
- 3月30日 『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック 展示と証言』刊行

コラム 相思樹

2019年、展示リニューアルに先がけて、傷みが激しかった大型証言本を再制作しましたが、このとき、全ての漢字にルビをふることにしました。難しくても内容は理解できなくても、体験者の言葉を熱心にたどっている子どもたちのためです。しかし、地名はもちろん、戦争中に使われた独特の言葉は現代ではなじみのないもので、ルビは大人にとっても必要だとわかってきました。

ルビを付けていると、名前で手がとまります。誰かの語りで聞いたことがあればよいのですが、そうでない名前も多いのです。戦争で書類が失われており、当時の資料は乏しいうえ読み方がわかるとは限りません。名簿の五十音順の並びも参照しますが、当時の名簿がない学年もあります。そこで、聞き取りのテープで語られた音を確認し、ご遺族や同窓生にも電話で教えていただくことになりました。「〇〇ちゃん」といった呼び方で関係性が見えてきます。名前は、その方の名前を呼ぶ方がいなくなると、漢字で記録されていても音が失われてしまうことを実感しました。この調査のなかで、名前を呼ぶ声を聞き、私も声になることになりました。いつでも名前を呼べるように記録できたことは、大切な成果のひとつになりました。

名前の音を探して、呼ぶ声をきく

説明員 仲田晃子

仲宗根政善日記抄(66)

(1980年)六月十八日

朝日新聞社記者榊原昭二氏が一昨日訪ねて来た。十三日に生き残りから戦争体験の話聞いたが、皆さん哲学を持っていると思うという。

生き残った生徒たちと話していると、一すじ通った強靱なもののあることを感じる。

沖縄戦をくぐって、生き残った生徒となくなった生徒を比較して見るとき、生き残ったのは強く、なくなったのは弱かったとか、あるいは勇敢であったとか卑怯であったとか、知恵があったとかなかったとか、神仏を信仰していたとか信仰していなかったとか、そんなことは生死にはいっさい関係なく、ただ運命によってさばかれたのだと思ったことがあった。しかし生き残りと話していると、精神的に極めて強靱なところを持っている。生死の境をこえて、その体験が彼の女たちをそのように強靱にしたのか。もともと強靱であったから、生き残ったのか、いつも不思議に思っている。榊原氏はそれを直観したのであろう。死線をこえて来た者はたしかに強くなっている。生命力が旺盛である。生命に対する自覚であろう。人間の生命こそあ〔ら〕ゆる人間の価値の根源なのである。生命に対する自覚こそがその人間をいきいきさせる。(中略)

沖縄戦ではすべての人が、点と線を歩いたのである。隣の壕で友達が死んだこともわからなかった。生き残りがあつまって戦争のことを話すとき、いつでも想像もつかないような新しい話が出て来る。その体験は一人一人がちがっていて、深い。一人や二人の戦記を読んだところで、沖縄戦の実相などはわからない。

曾野綾子さんが、^{ママ}内に来て生き残りの生徒数人と話したことがあった。一人一人の体験がちがいで、しかも知られない事実がこれほどにうもれているのかと驚き、「生贖の島」を書く気になった。榊原氏も同じことを感じたのであろう。沖縄戦の体験は、限りなく複雑でありしかも深い。(中略)

香川京子主演の東映の「ひめゆりの塔」の映画を見て、多くの観客はその惨状に目をお〔お〕うた。そうして戦争の悲惨を感じつつも、あの映画はフィクションだと感じていた。しかし、生き残りの一致した感想は、戦争の実相はあの程度の悲惨なものではなかったということであった。文章で、映画で、あるいは絵画によっては到底表現することの出来ない悲惨なものであった。陸軍病院のあの生き地獄の図絵はとうてい言語では語りつくしえない。そういう体験が生き残った者の心の底にどろどろと沈殿しているのである。ことばであらわされるとき、それははるかに遠くへぬけてしまう。壕に残された重傷患者のうめき声をわれわれは、再現して聞かせることは出来ない。配られた青酸加里のはいったミルクをあきらめて飲むことが出来ず、壕

からいざり出て、砲弾の中にもがき苦しみながら、いざっていることは、とても現実の者とは思えないのである。

榊原氏が、生徒たちは、美しく立派に死のうと思っていたようですねと尋ねていた。そのお尋ねが、あたかも凍死のように美しい幻想をえがきながら、美しい死の世界を夢みていたかのように聞えた。

おそらくそれはことばのききあやまりであろう。陸軍病院の壕内でも、また摩文仁へ移動の途中でも、もがき苦しみながら死にたえて行くみぐるしい死にざまをみせつけられて来た。あのような無残な死に方をしたくないというのが、喜屋武海岸へとおわれて行ったすべての者が願った最後の願いであった。死ぬなら一思いにもがきくるしみもなくきれいに死にたいと願ったのである。乙女らはとくにそのみにくいむくろを人前にさらしたくなかったであろう。この願〔い〕は、乙女らの一致した最後の願〔い〕であった。

ところが、戦争の実相をしらない者は、りっぱにしにたかったという、靖国神社を夢みて凍死のように美しい幻想を抱いて死にたかったと誤解する。

体験しない者には通じない。戦争体験は、こうした誤解を生みながら次第にあやまり伝えられて行く。

生き残りの者だけが、新聞記者や雑誌記者などとあいたがらない一つの理由は、そういうところにある。ことばは通じない。いつも誤解がともなう。とくに短い時間で取材して帰る記者の記事には多く誤りがある。生き残りたちが、マスコミ恐怖症にかかるのも無理はない。

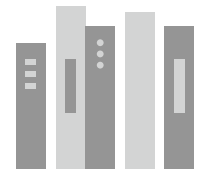
八時半に正巳からの電話。大隈軍医の息子は、父が沖縄戦で、戦死した時は、六才だったという。第一外科で戦死したことが、わかったので、家族そろって沖縄を訪問したいと言っているという。京都大学でいっしょで、今なお親しくつき合っている友達だとのこと。

さっそく第一外科手術室勤務であった仲里マサエさんに電話したらよく知っていて、奇縁だ奇縁だといって、第一外科婦長奥松文さんに電話で連絡してくれた。

大隈軍医はきびしい方だった。小柄で生徒や看護婦たちをしつけてくれた。奥松看護婦はびんたをはられたこともあったという。三十五年にして、親の最後の話聞けるといこともまことに不思議な話である。

※〔 〕は編集で補った。

※旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。



昭和 17 年一高女を卒業した木村明子は、昭和 16 年 12 月 8 日の日記に、「日米開戦。朝登校すると級友の O さんが、朝宣戦布告をラジオで聞いたと言うが一向にその気配がない。」と書いていた。しかし、昼前には、非常召集がかり、講堂に行くと、先生から、日本軍がホノルルを空襲したという話があり、開戦の事実を知る。

先生の話も O さんが聞いたラジオ放送によるものだろうが、沖縄放送局は、その時まで開局準備中で、開戦のニュースは「緊急措置」として放送されたものであった。

沖縄放送局が開局したのは、「緊急措置」^{のふきち}放送がなされた翌年の 1942 年 3 月 19 日。岩崎命吉が、二代目の放送局長として着任したのは、1943 年 5 月。「緊急措置」放送がなされた時、岩崎は、パラオ放送局の初代局長として、委任統治下の島にいた。

パラオ放送局が開局式を迎えたのは 1941 年 9 月 24 日。岩崎は、初代局長として開式の辞を述べ、その晩行われた「記念放送実演会」でも、挨拶に立ち「放送開始の意義から放送の重大使命を次々と説いただけでなく、「各種機器の説明を細かく述べ」（「パラオ放送局開局式を視る」『南洋群島』第七巻第八号 昭和 16 年 11 月 1 日）たという。岩崎が、『南洋群島』第八巻第五号に発表した「短波受信器に就て」は、「各機器の説明を細かく述べ」たものとなっているが、その前に岩崎は、パラオ放送局を設立して以来「敵性諸国家群包囲陣中に存在し群島文化の一機関として、亦これ等敵性国家群に対する宣伝機関として極めて重要な放送報国の使命達成に邁進」してきたこと、そして「大東亜戦争勃発に際し、其の全機能を遺憾なく発揮し在住民各位に御満足を與へ得たることは私共の最も欣幸とする所である」と力説していた。

岩崎が、沖縄放送局の二代目局長に抜擢されたのは、パラオでのそのような言動が日本放送協会の上層部に好意を持って迎えられたからであったに違いない。

本書は、パラオ放送局の初代局長として開局に携わり、そのあと二代目局長として沖縄放送局に着任した岩崎が残した屋嘉捕虜収容所で書かれた二冊の手記、および故郷山口に引き上げたあとに書かれた「第三の手記」を下敷きにしてまとめられたものである。二冊の手記は「沖縄戦に特化」したものであったといい、「第三

の手記」は、それらと異なり「戦火の降りかかる前の沖縄放送局のことが綴られている」ものであるという。

「第三の手記」の内容は、沖縄放送局に岩崎が着任したところからの軍の動きをはじめ、沖縄人の多く住むサイパン陥落のニュース、放送局員の家族の疎開、十・十空襲、自家用発電装置を用いてのラジオ放送、軍による電信送信機の接收、放送局職員が召集されたことに伴う第一高等女学校昭和 19 年卒業生の 3 人親泊トシ子、渡名喜君子、仲田ミエ* の採用、そして硫黄島の陥落といった、沖縄戦前夜の記録からなり、二冊の手記は、長参謀長との関係、アメリカ側の「対敵宣伝」、受信機の没収、放送局員に迫ってくる危機、放送局の被弾、放送局の閉鎖、米軍の上陸、通信隊の連隊本部のあった壕への退避、司令部の首里放棄に伴う南部への敗走、6 月 22 日の通信隊解散、米軍の投降勧告、屋嘉の捕虜収容所、帰還といった沖縄戦下の放送局と局員の動向を内容としていて、本書は、そのような時代の激動に翻弄された放送人の苦闘にわけいて書かれていた。

沖縄戦に関する記録は、それこそ汗牛充棟といったところだが、放送局に関する記録は、ほとんどなかったのではないと思う。本書は、沖縄放送局長岩崎命吉の手記を掘り起こし、戦時期の沖縄放送局の動きと岩崎の胸中を推しはかりながら、読み進めているだけでなく、放送局が「戦争の進行とともに軍のプロパガンダ機関と化し、真偽のほどを問うことなく日本軍の都合のよい情報ばかりを垂れ流し」たことや、「日本軍が一九四四年までに樹立したアジアの放送局」約 30 のうち、主要な放送局についても筆を伸ばして、アジアでの放送の様子がわかる貴重な一冊となっている。

戦時期の放送をかえりみ、著者は「国家のプロパガンダと化した言説がはびこると、とんでもないことになる」という。著者独自の見解というわけでもないが、放送文化に携わるものたちはいうに及ばず、私たちが肝に銘ずるべき言葉であろう。

*編集注：本書では「仲田美恵子」「仲田恵美子」と表記されているが、ここでは、本書掲載写真「沖縄放送局戦死職員慰霊碑」の刻銘に依って「仲田ミエ」の表記を使用する。

統計に見る2022年度

2022年度の入館者数は、個人・団体ともに回復傾向で、2021年度比で330%の増加となりました。ただし、コロナの影響が少なかった2019年度(491,345人)と比べると、約63%にとどまっています。

1 入館者状況

①有料 310,555人

2021年度 93,936人より +216,619人 330%

うち外国人 2,970人、前年度比 +2,376人

※2021年度より、慰霊の日は有料入館

開館以来 34 年間で 32 番目の入館者数
平均入館者：25,880 人(1 か月) 851 人(1 日)
開館以来 34 年間の累計：23,686,615 人
(1989 年度は開館期間 9 か月間)

②無料 18,704人

団体(県内学校団体・特別支援学校など) 5,257人

学校団体引率者 8,231人

修学旅行下見 1,371人

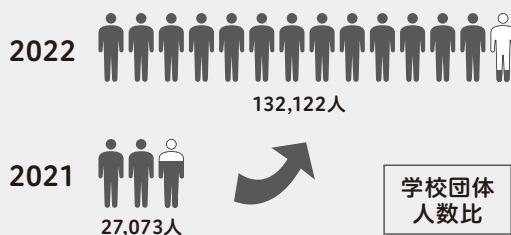
個人免除者(身障者手帳等提示の方など) 3,935人

※県内学校団体は入館料免除のため総入館者数には含まれないが、「2. 学校団体入館状況」(団体数・人数)には含まれる

2 学校団体入館状況

学校団体数 937校/132,122人

2021 年度 221 校、27,073 人に比較すると、+716 校、+105,049 人。全体の割合は、小学校 53 校(6%)、中学校 182 校(19%)、高校 702 校(75%)。前年度比で約 424% (団体数)。コロナ前の 2019 年度 1,838 校 (246,049 人) と比較すると約 51% (団体数)にとどまっている。



平和講話・ビデオ視聴のご案内 多目的ホールご利用について

多目的ホールにて職員による平和講話(約40分)やビデオ視聴(約30分)が可能です。入館の団体にかぎり、事前予約制となります。下記受付時間をご参照の上、お電話にて空き状況を確認後、FAXかメールで申込書をお送りください。なお、多目的ホールは平和講話、ビデオ視聴以外でのご利用(セレモニーなど)はできません。

▶利用時間 9:05~16:00 (最終開始時間)

- 年末年始(12月30・31日、1月1日~3日)、旧盆(旧暦7月13日~15日)、慰霊の日前後(6月21・22日、24日)はビデオ視聴のみ予約可能です。
- 慰霊の日(6月23日)は講話・ビデオともに予約できません。
- 予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルとなる場合もあります。
- 収容人員は約200人(席)です。

★2024年4月より、多目的ホールご利用には使用料金がかかります。詳しくはお問い合わせください。

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより
第71号 2023(令和5)年5月31日発行

【編集・発行】

公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館
〒901-0344 沖縄県糸満市字伊原671-1 TEL098-997-2100 FAX098-997-2102

ひめゆり平和祈念資料館 検索
<https://www.himeyuri.or.jp/>

